
天使と悪魔と死神と

プロジェクトE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と悪魔と死神と

【Nコード】

N7621X

【作者名】

プロジェクトE

【あらすじ】

一人暮らしの男子高校生の日常に突如わけのわからない事態が起こる。

死神！？ 天使！？ 悪魔！？ いきなり、押し付けてきた3人の生活が始まり、そして・・・

第01話 何故いきなりこんなことになっているかと言つと…

争いはなくならない。

最初にそう言つたのは誰だっただろうか。

まあ、どの時代の誰が言つたとしてもおかしくはない。

なぜなら、争いなんてものは無くならないからだ。

1000年前も、500年前も、100年前も、今のこの時代ですら争いは絶えない。

なぜなら、争いのもとになる物などいくらでもあるからだ。

貧富の差、宗教観、人種の差、利益の奪い合い、そんな物によつて人々は争う。

戦争は起こり、人は人を殺し、憎しみの連鎖は続く。

それでも、人は争う事をやめない。

だから何度でも戦争は起こるし、差別は止まらず、テロリズムは繰り返される。

誰に止められるものでもない。

大多数の人間は戦争など嫌だと言つのに戦争は起こる。

しかし、それは当然ともいえる。

戦争のように分かり易くなくともあらゆる場所で争いは起こっているのだ。

最も身近なものはいじめだ。

小学校や中学校、高校、大学、社会に出たとしても人は人を差別する。

こんなにも身近でも争いが起こり、しかしそれを止めるのは難しい。たったそれだけの事でも止められないのに戦争など止まるはずがないのだ。

だから、争いが無くなることはない。

まあ、なぜ俺がこんなスケールの大きな話をしているかと言うと、

「あゝ！それあたしの餃子！何盗ってんだよ！このイカレ極悪高慢欲深墮天使女が！」

「な、なんですって。私わたくしに向かってなんてことを言うんです！この尻軽ビッチ悪魔女！」

「どっちがビッチだ！男を誘惑しに来た淫乱天使のくせに！天使が聞いてあきれるぜ」

「あ、あなただって男を誘惑しに来たんじゃない！」

「悪魔つてのはそういう本質があるからいいんです。あんたは天使のくせに男を誘惑ってなんなんだよ。淫魔か！」

「こ、こ、こ、この私に向かって淫魔とは聞き捨てなりませんわ！こんな侮辱は初めてです！決闘を申し込みますわ！」

「望むところだ！受けてやるよ！餃子の恨みを思いしれ！」

ガキイイインという甲高い音が室内に響く。

長い金髪に白い翼を持つ女の子の持つ杖と赤い髪を結いあげて背中に蝙蝠のような翼と黒い尻尾を持つ女の子の三叉槍が激しくぶつかる音だった。

そんな二人を見てさっきの会話に加わっていなかった白髪じゃなくて銀髪の女の子が止めに入ろうとする。

「二人とも喧嘩はやめてください！」

「あなた」「あんた」「は口を挟まないで」「ください！」「くれ！」「

ひう……。」「

二人に怒鳴られて喧嘩を止めに入った女の子は小さくなってしまう。

と、このように俺の前でも己の利益ギョウザのために争いが起こり、俺は止められないでいる。

つまり、俺がなんであんなにスケールの大きな話をしたのかと言うと、目の前で餃子の奪い合いなどと言うスケールの小さなことを発端に自分の家の食卓がなんで槍やら杖やらが乱舞する闘技場になるのかという疑問が生まれたからだ。

いつから俺の家の食卓は古代ローマ時代のオリンピック会場になったのだろう。

もちろん二人の争いは止まることなく現在も続行中だ。

少し意識を二人の方へ持っていけば、武器を振う二人のはあッ！とかいう掛け声が聞こえてくるが、あえて俺は現実から目をそらしたい一心で聞こえないように心をそらす。

うん、分かってる。

気をそらしても、色々な物が壊れていく光情報が目を通して脳に訴えかけてくるからな。

あゝあ、俺の湯のみが。

今度は俺の茶碗が。

俺のコーヒークップが、つつってえええなんで俺のものばかり壊れてくんだよ。

わざとかわざとなんですかああああん！？

なに、これは二人の喧嘩じゃなくて、二人で俺にケンカを売ってるのか！？

しかし、はつきりいつてあんな槍が降り杖の踊る死地に向かって生

き残れるほど俺は人間やめてない。

だから、文句も言わず心の中で叫んでいるのだが、いかんせん物が壊れすぎだ。

はあ、どうしたら止まるのやら。

可愛ければ何をやってもいいのか！？

確かに目の前で暴れている二人と止めようとしてもオロオロするしかない一人は可愛い。

ハッキリ言って美少女と言って間違いはない。

だからって美少女なら何をやっても許されるかと言われればそんなことはあるはずがない。

はあ、このあいだまで俺の家には俺しか住んでいなかったはずなのになんでこんなに五月蠅ぐずぐずくなってしまったのだろう。

確かに誰も居ない家に一人いるのは少しさびしかったが、家がコロシラムになっなってほしいと願ったことは一度もないのだがな。

あーどうも、うちのアホ共が騒さわがしくてすいません。

この家の家主、神宮寺悠哉じんぐうじゆうざいです。

なぜこんなにうちが騒さわがしくなっているんでしょう。

正直、俺自身も完全に理解しているわけではありません。

でも、こんなことになった始まりは或あるわけで・・・

まあ、ここに至るまでの回想を始めます。

第01話 何故いきなりこんなことになっているかと言つと…（後書き）

はじめて投稿するオリジナルです。

うまく書けるかは分かりませんが、読んで楽しんでいただければ幸いです。

2次創作の方もやめていません。

だいが更新がされていませんが書いています。

では、どちらもよろしく願います。

第02話 日常の壊れる直前の日常

「ただいま」

そう言っつて、いつものように玄関の扉を開けるが返ってくる返事はない。

迎えてくれるのは、やはりいつものように人気ひとけのない玄関と鎮まりかえっている廊下だけだ。

しかし、それも当然のことだ。

今、この家で暮らしている人間は俺1人。

これで返事が返ってきたら泥棒や強盗の可能性を考慮しなければならなくなる。

この家に人気ひとけがないのは、別に俺の両親が死んだからとかそういう暗い理由があるわけではない。

単純な話し、両親共に仕事で家を空けている期間が長い、ただそれだけだ。

ただし、その期間は兎とにかに角やたらめつたらに長い。

海外を転々と移動する仕事らしく、1年に数日帰ってくるかどうかと言った具合だ。

らしくと言っつのは、俺自身両親の仕事がよくわからないからだ。

小さい頃に人を助ける仕事だと教えられたが、詳しい仕事内容は誤魔化されてどうしても知ることが出来ずに、そのまま現在に至る。

2週間前にはドイツから地元の人達とビールを飲んでいる写真の絵はがき（写真はがき？）が届き、一昨日にはブラジルでコーヒード豆の収穫をしている絵はがきが届いた。

両親共に無事健在ということにはわかったが、本当に仕事をしているのか怪しく思っつてしまっつ。

だが、俺の口座には毎月きちんと余裕のありすぎるくらいのお生活費が振り込まれるため、仕事はしているのだろう。

それにしても、近年の帰宅率は酷い。

俺の成長に伴い、長くなっているような気がする。

もともとなかなか帰ってこなかったが最近では1年以上に渡って帰ってこないこともある。

そのため、実質独り暮らしというわけだ。

そんな誰もいない家に帰ることにはとくに慣れてしまったがそれでもふと寂しく思うときもある。

だからというわけではないが、俺は学校から帰ると最低限の事しかしなくなっていた。

洗濯物を取り込み、買い物、風呂掃除、夕飯の準備、夕飯、夕飯の後片付け、学校の宿題、洗濯、そしてすぐに就寝 という一定のサイクルを行う日々。

家事の腕は上がっていくが娯楽からは遠ざかっている。

テレビですら見たいと思うものもなくなり、夕飯のときに手持ちぶさたになって、偶々放送している白銀伝説やクイズペンタゴン、大正教育委員会を流し見するくらいになってしまっていた。

今日もいつものように既定のサイクルを繰り返すだけになるだろう。そう思いながら、自分の部屋の床に学校の荷物を降ろした。

ちょうどその時、インターフォンが来客を知らせた。俺の家には基本的に俺しかいないためわざわざ来る人間はそうそういない。

友人ならメールが先に届くだろうし、学校で何かしらの連絡があるはずだ。

可能性としては、セールスマンもしくは…、

「早く開けてよ悠哉^{やうがい}、荷物が重いんだからっ」

玄関の近くに来た瞬間に外から声かけられた。というか怒られた。

その声だけで誰がなんの目的でやってきたのかわかった。
閉めておいた玄関の鍵を急いで開けるとボニータールが特徴的な女の子が倒れるように入って来た。

「開けるのが遅いよ、シチュー重いんだから早く開けてよね」

来客がシチューを持っていることを前提に行動せよと言う事なのだろうか。

それは、ちょっと預言者になれる域にしか出来ないと思うのだが。

「悪い悪い、来客がシチューを持っているとは思わなかったからな。それに悪徳セールスでもきたのかと思つて様子を見てた」

「ひどつ！　せつかく持つてきてあげてるのに」

このシチューを鍋ごと持つてきてくれたボニータールの女の子は水無月陽菜。なづきはるな俺の家の隣にすんでいる水無月家の長女で俺と同じ高校1年生、そして子供の頃からの俺の友人、いわゆる幼馴染おきななじみみというやつだ。

名前の読みは陽菜はるなだが、昔から俺は陽菜ひなと呼んでいる。

漢字の読み間違えからそう呼ぶようになったのだが長い間呼んでいたため既に定着してしまっている。

まあ、定着してしまつたのも、読み間違えと知つたのが割と最近のことだったりするからだ。

今のクラスでも、俺に影響を受けて陽菜の友人達もヒナと呼ぶようになっていた。

長い間というのは、親から聞いた話では、俺と陽菜がはじめて会つた、幼稚園入園前に公園で一緒に遊んだ時まで遡るらしい。

そのときから幼稚園、小学校、中学校とずっとおなじ学校に通つた。今でも、同じ高校の同じクラスで、少なくとも12年以上の付き合い合

いになる。

そんな長い付き合いで俺の両親がほとんど家に帰らないこともあり、たまに料理を持ってきてくれる。

その料理も4回に1回くらいの割合で陽菜が作っているらしい。

ちなみに残りの3回は彼女の母親によるものだそうだ。

そのため割と家族ぐるみの付き合いになっている。

その理由として大きいのは内の母親うちと陽菜の母親の水無月香織さんがかなり仲が

いいことは関係なくはないとおもっ。

「いつもいつも悪いな」

「べつ、別に作りすぎちゃっただけだし、それに今日のはお母さんが作ったんだからお礼

なら私にじゃなくてお母さんに言って」

「ああ、香織さんにもありがとうございますって伝えてくれ。それに陽菜もいつも持ってきてくれてありがとな」

「えっ、あう、うん…」

陽菜は顔を赤くして俯いてしまった。

どうしたというのだろう？

「そうだ、貰ってばかりじゃ悪いし、上がっていくか？ お茶くらいなら出すけど」

「えっ、悪いしいいよ」

「気にするなって、どうせ俺おれんちん家には俺以外誰もいないんだし」

「！！！！　だ、誰もいない家に私を連れ込んで何をするつもりっ！」

「はい？」

「あつ、何でもない…です」

陽菜はさらに顔を赤くするとボソボソと呟いた。

陽菜は時々こんなかんじに訳の分からないことを言うのだが、俺には未だにこのタイミングだけはよくわからない。

「で、どうする？上がっていくのか？」

俺が再び聞くと陽菜は首を横に振った。

「ううん。せつかくだけこのあと塾があるから遠慮するよ」

「そっか、じゃあいつまでも引き留めちゃ悪いな。　じゃあ、シチユーはありがたくいただきます」

「うん、よく味わって食べるように」

「わかった、一口百回は嚙んで食べるようにしよう」

「それじゃ美味しくなくなっちゃうよ」

「冗談、普通に味わって食べるよ」

「よろしい」

そんなふうに通りふざけあって笑い合う。

こうしていると誰もいない家にすんでいることも少しの間忘れてしまふ。

多分、陽菜も分かっている気が使ってくれているんだと思う。

そして、陽菜が帰ろうと家の門の前まで歩いたとき、

「あつ、そういえばこの近所で不審者が出るから伝えてきてお母さんに言われてたんだった。何でも大きな刃物を持ってるらしいから気をつけて。大丈夫だとは思っけど、しっかり戸締まりをしてから寝てよ」

「あれ、もしかして心配してくれてるのか？」

「なっ！べ、別に心配なんてしてないもん。悠哉ゆうざいなんて不審者に襲われちゃえ！」

べーっと舌を出して、陽菜は水無月家に入って行ってしまった。

また、陽菜を怒らせてしまった。

陽菜は俺のよくわからないところで怒る。

これは、訳のわからないことを言うのと同じくらい読めない。

それにしてもこの町で不審者とは珍しい。

事件や事故が最も少ない町というPRもあるほどこの町は穏やかなんだ。

まあ、そういうこともあるだろう。

そう思いながら俺はもらったシチューをキッチンに運んだ。

このときの俺は陽菜からもらった情報をどこか遠くのこのように考えていた。

しかし、結果からいえばこの情報が俺の人生にとってかなり重要だったということはこのときの俺にはしるよしもなかった。

まあ、このことを気にかけていたとしても事態は変わらなかった可

能性は高いが。

第03話 えっと、わ、私のために死んでください

グシャ、肉を潰すつぶような音が体の芯しんを貫ぬいた。

その時の俺には何が起こったかは、全く分からなかった。

確か俺はいつものように学校に行こうとした。

いや、いつもどおりではないか。

その日俺は寝坊した。

普段よりも遅く起きてしまったため、急いで学校に行かなきゃならないと思い朝食を早めに済ませた。

朝食は昨日の夕飯として食べきれなかったシチューをメインにしたものだった。

それを食べ急いで学校に行こうとした矢先のことだった。

未だに脳が追い付かない。今起こった現実を信じられない。

ただ、肉の潰れる感触が体に残っている。

俺は・・・、

俺は・・・、

俺は、玄関を開けてすぐのところに倒れていた女の子を踏みつけてしまったのだった。

足の裏から人間を踏んだ感触が脳のでっぺんまで伝わってくる。

過去形ですらない。

今現在踏んでいる。

こんなところを誰かに見られたら俺の人生は色々と終わってしまう。言い訳しようもない。

なぜなら、現在進行形で踏んでいるから。

と、ここまで考えたあたりで俺は急いで足をどけた。

勘違いしなくてももらいたいのだが、回想から足をどけるまで1秒もかかっていない。

俺には女の子を踏み潰して喜び興奮するような特殊な性癖はないし、この場でそんなドSっぷりに目覚める予定もない。

むしろ踏んでいることに気が付いた瞬間に青ざめたほどだ。

まあ、足から伝わる変な感触と『もぐふえ』などという断末魔^{だんまつま}じみたものを聞けば誰だって青ざめるはずだ。

なにはともあれ、声を上げたということは死んではない・・・はずだ。

さつきは声の感じと髪長さから勝手に女の子だと判断したが、うつ伏せに倒れ顔がみえないため確実に女の子かどうかの判断は出来ない。

近頃は男の娘^{おにい系}っていうのが流行っているらしいからな。

髪型、声、服装でも性別の判断材料にはなりえない。

いや、ましてそうしたら何で性別の判断をすればいいんだ？

○んこでも確認しろっていうのか？（○には好きな文字を入れよう

♪）

落ち着け俺！

性別なんて確認しなくてもいいじゃないか！？

確認しなければならぬのは生きてるか死んでるかだ。

「あのー、生きてますか？ まさかとは思いますがお亡くなりにはなっていないせんよね？」

「・・・」

肩のあたりをつついて声をかけてみたが返事がないただの屍のようだ。

ヤバい、俺の踏みつけで仕留めてしまったのかもしれない。

こんなことで前科者になるのは嫌だ。

明日の新聞の第一面に『路上生活女子、男子高校生に踏まれて死亡』なんていう文字が躍るのだけは避けなければならない（色々と間違っている）。

こういうときは、どうすればいいんだっけ。

さすがにコレを無視して玄関先に放置しておくのは世間体的による

しくない。

えっと、こういうときは東京湾に沈^{チン}すればいいんだっけ？

いや、それじゃ完全に犯罪者だ。

とりあえず、息をしているか確認しなければ。

そして、俺は倒れていた推定女の子をうつ伏せから仰向けに裏返した。

その時、俺は初めてこんなに綺麗な女の子を見た。

銀色の長く綺麗な髪、真っ白な透き通るような肌、すっと通った目鼻立ち、ほっそりとした腕と足、そして『もぐふえ』なんていうカエル^{カエル}の潰れたような声を上げたとは思えない艶やかで綺麗な唇。

少しの間みとれていた俺だが今やらなければならぬのは生存戦りや…、ゴホン生存確認だ。

仰向けにした彼女（確定：なぜなら胸があつた）の顔の前に手をかざす。

・・・、

・・・息してねえ。

マズイ、息が掌に吹き掛けられてこないぞ。

肺の辺りも上下に動いていないし。

こういうときは、心臓マッサージ、いや人工呼吸か？

学校で習った救命講習の内容を全力で思い出す。

確か、気道確保つって頭を後ろ側に倒す感じで、『ゴッ』、・・・

あれ盛大に（倒れていた女の子の）頭をぶつけた（ぶつけさせた）気がする。

更にヤバイ！

なんかピクピク痙攣^{けいれん}しはじめた！

さっきより俺の犯罪レベルが上がった気がする。

このままじゃ、犯罪経験値が上がってジョブチェンジ、そして殺人犯になってしまう可能性も・・・。

それは困る。

で、でも取り敢えず、気道確保はできたはず。

次にするのはなんだっけ？

・
・
・

・・・ん、どう頭を巡らしても答えが人工呼吸しか浮かばない。
ああわかってるさ、次にしなきゃならないことは人工呼吸だってことくらい。

ただ、悪いことは連鎖するっていうし、人工呼吸をしようとした瞬間に女の子が目を醒まして襲われたと勘違い、そして警察沙汰と言うこともあり得そうで怖い。

考え過ぎか？

だ、大丈夫だよな。

人工呼吸はファーストキスには含まれません！

よし、大丈夫だ。

それに命の危機だもんな。寧ろ放置した方が問題だ。

俺は覚悟を決めて女の子の顔に自らの顔を近づける。

顔を近づければ近づけるほど心臓がバクバクする。

だって、睫毛とか超長いし、肌は真っ白できめ細かいし、少し開いている唇が艶かしいし、神秘的な雰囲気はより鮮明に感じられるし、今顔を離したらこの位置まで顔をもってこれないかもしれない。

決意を揺るがしたくない俺は彼女に吹き込むために大きく息を吸う。

神宮寺悠哉 一世一代の初人工呼吸だ。

そして俺は、銀髪の美しい少女と唇を重ねた。

一瞬が永遠にも感じられようだった。

ただ、その永遠は驚きによるものだった。

パチッ、その瞬間彼女の目が開いたからだ。

「！！」

時間が止まったかと思える程に真っ白になる思考。

少女も目覚めていかなり口付けされていたことに驚き目を見開いている。

冗談キツいって、キスした状態でどんな言い訳ができるっていうんだ。

これじゃあ、前もって考えていたの方がましじゃないか。

少なくとも考えていた方はキスする直前で相手が目を覚ますんだから、未遂。

しかし、今の状態は事後。

つまり、アウトだ。

さらに今俺は何をしようとしていたか思い出して欲しい。

それは人工呼吸、つまりいきを吹き込もうとしていたわけだ。

息を吹き込もうとして唇を重ねたのだ。

そこでいきなり相手が目を醒ましたからといって最初に行おうとしていた動作が止まるだろうか。

いや、残念ながら人間の体はそこまで咄嗟の判断が出来ない。

結果として俺は目を醒ました少女に向かってキスした挙げ句口移しで息を吹き込んでしまったのだった。

「むぐううう」

銀髪少女は、いきなり息を吹き込まれ苦しむようなくぐもった声をあげる。

まあ、口を塞がれているのだからくぐもった声しかあげられないのだが。

いきなりの出来事に頭がついていかなかった少女も目の前の現実に顔がみるみる真っ赤に染まった。

これはリアル警察沙汰ではないだろうか。

そして、俺は息を少女の口にたっぷり吹き込んでしまったあとに飛び退いた。

少女は顔を真っ赤にしてうつ向いてしまっている。

それを見た俺のすべき事は一つしかなかった。

「す、すいませんでした！ でも悪意はなかったんですよ。あな
たの息が止まっていたので人工呼吸をしたんです」

The 土下座。

俺は土下座しながら謝罪と言い訳を早口で言った。

土下座して地面を見つめる時間が酷く長く感じられる。

自宅の前で女の子に向かって土下座。

これはこれで世間的に最悪の光景だった。

少しの間気まずい沈黙が俺と少女の間に流れる。

そして、その沈黙を先に破ったのは、俺にキスをされ気が付いた時
には純潔を奪われていた少女だった。

「あ、あの神宮寺悠哉さんですよ？ えっと、わ、私のために死
んでください」

第04話 や、やっぱり、キスや口付けの意図が、あ、あったんですね!?

・

・

・

ん、なんだって？

死んでくださいって言われたかの今？

い、いやいやまさかー。あ、あれだよな。

信じて下さいの聞き間違いだよな。

いや、このタイミングで信じて欲しいのは俺の方か。

じゃあ、やっぱり死んでくださいって言われたのか？

恐る恐る俺（身長170センチ）が顔をあげるとそこには成人男性の背丈ほど（170センチ強）もある大鎌を俺に向かって構えた少女（身長約155センチ）がひとり。

結論、どうやら許されなかったようだ。

そんな状況に陥ることでおちい『何で名前を知っているんだ』とか『何で俺の家の前で倒れていたんだ』とかいう疑問はあつという間に消え失せた。

人間命の危機が迫ると小さいことはどうでもよくなるらしい。

「ご、ごめんなさい。本当に息をしてなかったから人工呼吸をしようと思ったんです。他意はありません。嘘じゃないです。ですから命だけは勘弁かんぺんして下さい」

すると少女は顔を真っ赤にしてうつむきながら首を横にふるふるふった。

鎌を突きつけられながら思うことじゃないが・・・可愛らしい。

「い、いえ、人工呼吸されたのは、と、とっても恥ずかしかったですけど・・・で、でも、それとは関係なく、し、死んでくれませんか？」

「えっと、それは人工呼吸もキスも口付けも息を吹き込んだのも関係なくですか？」

「や、やっぱり、キスや口付けの意図が、あ、あつたんですね!？」

「ごめんなさい、口が滑りました」

「か、隠す気もなくなってます!？ 酷いひどです。は、初めてだったのに」

「安心して下さい。俺も初めてです」

「安心する要素じゃないですよ」

少女は鎌の先端部せんたんを下げ、項垂うなだれるように呟つぶやく。
いまさらだが、大鎌を構えた相手に向かってよく軽口を叩いたと思う。

人間あまりにも常識はずれな現実を目の前に突きつけられると一周回って正常な判断が下せなくなるのかもしれない。

いや、一周回らなくても正常な判断が下せたかどうか分からないが、それでも鎌を突きつけられた瞬間よりは落ち着いてきた俺は、

「えっと、キスが原因じゃないとしたら、何で俺は殺されなきゃならないんですか？ 俺、君とは初対面・・・ですよな？」

と恐る恐る聞く。

自分では覚えていなくても実は相手にとって大事なことも知れないからだ。

もし、ヤンデレの方だと『何で覚えてないの！ 私は覚えているのに！』みたいな感じで怒らせかねない。
いや、これはメンヘラか。

「うう、もう人工呼吸ですらなくキス一択になってますね・・・でも、そ、そうですね。 初対面ではありますよ？」

食いつくところが違ったが逆に助かった。じゃあ、

「もしかして俺の両親が祖父母に恨みがあったりします？」

「えっ？ ち、違いますよ？ あなたのご両親にも他の親族の方たちにもお会いしたことなんてないです」

「じゃあ、金で雇われた殺し屋だったりします？」

「も、もちろん、違いますよ」

「・・・」

ここまで言っただけならなければ、本当に命を狙われる心当たりがない。

殺し屋のあたりですでに狙われる心当たりはないのだが、これ以上は何も出てこない。

「じゃあ何で俺は殺されなきゃならないんです？ まさか、『地獄からの使いだ』なんていうんじゃないですよね？」

「お、惜おしいです」

「惜しいのっ!？」

昨日偶々友達に勧められた漫画が確かそんな感じの内容だったので
超テキストに言ったんだが・・・まさか答えに近づくとは。
少女は覚悟を決めたように大きく息を吸うと、

「えっと、わ、私は冥界めいかいから来た死神見習いなんです」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙

圧倒的沈黙

返す言葉がない。

というか何て返せばいいのかわからない。

えっと、電波さん？

それとも頭が残念な人？

ここで迂闊うかつに答えたら危険かもしれない。

鎌を持つてる時点で危険なのは確かなのだが、頭の残念な方に懐なつか
れると一生付きまとわれることもあると言っし。

ここは慎重しんちょうになるべきか。

いくら見てくれが良くても中身がどうなのかまでは分からないから
な。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙に堪えかねて少女は『あはー』と笑いかけてくる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ついに沈黙に耐えられなくなった少女は『あはー』と笑いながらも目尻に涙を浮かべ始めた。

くそっ、俺の良心を人質にとりやがった。

このまま黙ってたら俺が泣かしたみたいじゃないか。

「・・・そ、そうか、死神、ね。うん、分かったよ。えっと、じゃあそうだね、俺は君を病院につれていけばいいんだよね？ えっと、この場合は精神科かなそれとも脳外科？」

「す、すごい失礼なことをさらいといいますね。そ、そんな『分かってる、だから何も言わなくていいんだ』みたいな憐れみの視線を向けないでください。わ、私の頭がおかしいみたいじゃないですかっ！」

「うん、そうだね。きっと神様はいますよ」

「うっ、可哀想なものを見る笑顔で私の話を聞き流さないでくださ

いゝ。あと、病院も必要ないですゝ」

「知ってるか？ 酔^よっぱらっている人ほど酔ってないっていうんだ」

「そ、それって遠回しに『頭がおかしくない』って言っている私は頭がおかしいって意味ですよね!？」

「何故^{なぜ}分かった!？」

「い、いくら何でも酷^{ひど}すぎませんか!？」

「だって、死神なんて見たことないしね。俺のなかで君は、? 夢見がちな電波さん、? 頭が可哀想なコスプレイヤー、? 誰かのドツキリ、? 俺の欲求不満が生んだ幻覚、? ゆめおち、だもん。個人的には? が最有力候補」

「わ、私の存在をどれだけ信じてないんです!?? とか私の存在を信じないために自分自身を貶^{おとし}めることにすら躊躇^{ちゅうじゆ}がないですし!」

「そうは言われても、俺は自分の目で見たことしか信じないし」

「め、目の前にいるじゃないですか!?? 私が死神ですよ」

「いや、見た目が人間と変わらない人を死神と断定できるスキルは持ち合わせてないもんで」

「じゃあ、どうしたら信じてくれるっていうんですかー!」

「そうだなー、死神にしか出来ないことをして見せてくれたら信じるよ」

「な、なら、これでどうですか」

そう言うと銀髪少女の手に握られていた鎌が突然虚空に掻き消えた。

「えっ、スゲー！ 凄腕の手品師だったのか、いや、だったんですか！？」

「て、手品じゃないですっ！ 本当に消してるんです。これでダメなら何したらいいんですか！？」

「目から特殊熱線でも出したら信じられるかもしれない」

「あ、あなたは死神を何だと思ってるんですか！？ むしろ、目からビームなんてでたら、あなたは死神だって信じられるんですかっ？」

「うゝん、無理だな」

「……あ、あなた私で遊んでませんか？」

「……バレた？」

「う、うわゝん、ひとでなし」

自称に死神に人でなしと言われても……と思う。しかし、ついに軽くではあるが泣かせてしまった。

俺は銀髪少女を上から下まで眺める。

普通に日本語を話しているからあまり気にしていなかったがこうしてよくみると日本人離れた顔立ちだ。かといって旅行にきた外国

人とも違う雰囲気を持っている。

それは普通の女の子とは種類を異にする雰囲気。

なんというかほんのり神々しい感じた。（神々しいと言っても、もちろん死神とはみとめないが）

だが、それも顔の綺麗さは抜かして考えての感じなのだ。

だが、それだけで死神なんてものと断定することはできない。

かといって、命を狙われる覚えはないのだから、話を聞かなければならない。

しょうがないが、話を合わせるしかないか。

「・・・えっと、じゃあ君が死神（？）だったとすると何で俺が命を狙われることになるんだ？」

俺に少しでも死神だと信じられたことが嬉しかったのか表情をパツと明るくすると喜びを含んだ声音で答える。

「は、はい。さ、さっきも言ったと思いますが、私は死神見習いで正式な死神じゃないんです。私たち死神見習いは正式な死神になるための試験に合格してはじめて一人前の死神として認められるんです。その試験というのが指示された人間の魂を回収してくることなんですけど、今回の私の試験におけるターゲットがあなただったというわけなんです」

なんてはた迷惑な試験なんだと思いつつ気になったことを聞く。

「・・・なあ、一つ疑問に思ったんだが、なんで君は俺に死んでくさいなんて確認を取ったんだ？ そりゃ、俺としてはいきなり殺されるのは御免被るが、わざわざターゲットに向かって『死んでください』なんていうのは逃げられる可能性が増えて死神にとってデメリットにしかないんじゃないのか？ いきなり後ろからザッ

クリやられたら俺だってどうしようもなかったぞ?」

すると自称『死神見習い』少女は『うつ』と言葉に詰まらせる。
なんだ?

一度断つてからじゃないと死神ってのは人の魂を奪えないのか?

いや、この反応から察するに他の死神（いるとは思えないが）は普通こんなことはしないだろう。

たまたま
偶々、ついすっかり聞いてしまったとかか?
どんなうっかりだよ。

と思いつつ俺が問いの答えを待っていると、

「え、えっと、笑わないでくれます?」

「笑われるような事なのか? まあ、いいや。笑わないよ、これでいいか」

「は、はい。わ、私見習いだからまだ人の魂^{こゝろ}って回収したことなくて、それで、えっと、人を鎌^{こぎり}で貫^ついて殺すのってまだ怖いんですよ・・・」

死神として致命的^{ちめいてき}だった。

「・・・・・・・・」

「・・・えっと、何か言ってください。黙られちゃったら悲しいじゃないですか」

「1つ聞いていいか、他の死神見習いが最初に魂回収するときどうしてるんだ?」

「え、えつと、私も詳しくは知りませんが、多分人間の魂を回収するのに怖がつたりしないんじゃないでしょうか？」

疑問形で言われても俺が知るはずがないだろう。

頭が痛くなってきた・・・

「・・・じゃあ、もう一個だけ質問。さっき、俺に『死んでください』っていつていつてたけど、人を殺すのが怖いんだろ？ だったらどうやって俺を殺すつもりだったんだ？」

気付いたら、ていねいくちよう丁寧口調も崩くずれていた。

しかし、少女はそんなことは気にせず、

「えつ？ こ、殺す気なんてありませんよ？」

「はあっ？」

予想外の答えに俺は思わず間の抜けた声をあげてしまった。

「いや、だって『死んでください』って俺に言ったじゃないか」

「はい、だから『死んでください』ってお願いしたんですよ」

んっ・・・・・・？

「えつと、それは俺に自分で死んでくれ、つまり自殺してくれって頼んでたのか？」

「は、はい、『私に殺されて下さい』なんて言ったわけじゃありませんよ？」

ターゲットに自殺を頼む死神なんているのか、それは既に死神じゃないだろ。

「・・・じゃ、じゃあ、俺に鎌を突き付けたのは何だったんだよ！？」

「えっ、ひ、人にものを頼むときは自分の鎌を相手に突き付けるのが、冥界^{めいかい}では普通なんですけど、人間界では違うんですか？」

「・・・・・・・・」

「お、おかしいですか？」

「あ、あたりまえだーっ！ 冥界とやらではどうか知らんが、人間には鎌を突き付けてお願いする風習はない！ それはお願いじゃなくて脅迫^{きょうはく}だ。それに鎌を突き付けられながら『死んでください』なんて言われたら普通殺されると思うわっ！」

「ひう、ごめんなさい。 私が人間界のことに詳しくなくてごめんなさい」

初対面の人間に突っ込みをいれたのは初めてだが少女は怒られたと感じてしまったらしい。

はあ、どもり癖^{くせ}といい、『ひう』なんて言って縮こまるところといい毒気を抜かれる少女だ。

「別に怒ってるわけじゃないから縮こまらなくていいんだが・・・」

「す、すいません」

はあ、仮にこの少女が死神で、俺が自殺して魂を回収することに成功したとしても、その後死神としてやっていけるかと言われれば、もちろんNOだ。

こんな性格でこのあと殺^やつていけるとは思えない。

ここは、はっきりと現実を教えてあげたほうが本人のためだろう。

「なあ」

「はい？」

「はっきり言うけど君、死神に向いてないと思うよ」

「が、がーん！」

少女は絶望したつというように青ざめた。

かなりショックをうけたようで表情に暗い影が射している。

どうでもいいが、『がーん』なんて口に出しているやつはじめて見た。

「君は人を殺せないんだろ？ そんなんじゃ死神は続けられないと思うわけなんだけど」

「ふ、普通、そう思ってもあえて言わないのが日本人の人情ってものなんじゃないんですか」

まあ、そうかも知れんが、日本人どころか人間であることすら否定している少女に日本人の人情を問われるのは釈然^{しやくぜん}としない。

俺は頭を掻^かいて、

「傷つけたんなら謝る、でもそう感じたもんだから」

「うう・・・い、いえ、いいんです。薄々は自分でもわかってました。こんなじゃ死神なんて出来ないって」

「じゃあ、今からでも故郷に帰って別の仕事でも探したらどうだ？」

そう言うと、死神少女は悲しげに笑った。

「そうでしたら良かったんですけど、そういうわけにはいかないんですよ。冥界には死神以外の仕事なんてありませんから」

「そうなのか・・・ってヤバい！」

不意に腕時計が気になり時間を見ると学校に遅刻するか間に合うのかギリギリの時間になっていた。

「悪い、話しの最中に悪いが学校に遅刻するってことでじゃあな」
言い終わる前に走り出した。

「あ、ちよつと待つ・・・」

自称死神少女が何か言ってた気がするが気にしている余裕はなかった。

なぜなら、うちの学校には遅刻するとトラウマになるほど生徒をしばきまくる生活指導がいるからだった。通称ビスマルク。

鉄血政策のあの人の名前だ。

一番最初にしばかれた生徒がその日の歴史の授業で習ったことからつけられたあだ名らしい。

普段はどこにでもいる口数の少ない強面の男子教員だが風紀を乱す輩には非常に厳しい。

まあ、怒る基準がよく分からないが。

なぜそんなに詳しいかって？

それは俺こと神宮寺悠哉じんぐうじゆうやも1度しばかれてトラウマになっているからさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7621x/>

天使と悪魔と死神と

2012年1月12日10時51分発行